

# イタリア語における冠詞の問題点

古浦敏生

## §1 現代イタリア語の冠詞の形態とその由来

現代イタリア語には定冠詞 (articolo determinativo)、不定冠詞 (articolo indeterminativo)、部分冠詞 (articolo partitivo) の3種が存在し、それぞれの形態は下の表に示す通りである。

数 \ 性	sg	pl
m.	il, lo, l'	i, gli, gl'
f.	la, l'	le

m.	uno, un
f.	una, un'

数 \ 性	sg	pl
m.	del, dello, dell'	dei, degli
f.	della, dell'	delle

定冠詞はラテン語の指示形容詞 *ille* から発生したものである。il は *il* (*le*) より、la は (*il*) *la* より、le は (*il*) *lae* より、lo は (*il*) *lum* より、gli [*li*] は (*il*) *li* より由来している。これら定冠詞の形は A.D. 960 年のイタリア語初出文献 (Placito di Capua 「カプアの法令」) にはまだ現れず、ヴァチカン図書館所蔵の 10 世紀の俗語詩の中に初めて登場する<sup>(1)</sup>

不定冠詞はラテン語の「1」を表わす数詞 *unus*, *una* に由来し、早くも 8 世紀には完全な形として資料に現れる。即ち、*et infra terrula est uno pero*. 「その土地の下手(しもて)には 1本の梨の木が在る」<sup>(2)</sup>

これに対して、「前置詞 *di* + 定冠詞」に由来する部分冠詞の発生はやや遅く、1200 年代以降であろうと思われる。例えば、*se tu hai corno, del vino ti do io volentieri*. 「もしも汝が角笛(型の杯)を持っているのなら、私は喜んで汝にワインを与えるであろう」(Novellino 「古譚百種」第 23 話)。ダンテ・アリギエーリ (1265-1321) の代表作「神曲」にも若干その用例が見られる。Quando fui desto innanzi la dimane, pianger senti' fra il sonno i miei figliuoli ch'eran con meco, e dimandar del pane. 「私が夜明け前に目ざめた時、私は自分と一緒に居た息子達が夢の中で泣き、パンを求めているのを感じた」(Inf. XXXIII, 37-39)。しかし、部分冠詞の使用が大きく広がったのは 1300 年代に入ってからのことである<sup>(3)</sup>

## § 2 従来の諸研究のリスト

ここで、内外の学術雑誌に掲載されたイタリア語の冠詞に関する論文 27 点を、著者のアルファベット順に列記しておこう。なお、文献の左肩の番号に○印を付したものは、Hall, R.A. Jr. : *Bibliografia della linguistica italiana* 「イタリア言語学文献集」 vol. I, II, III, 1958, Firenze に所収の基本文献である。

1. Ageno, F. B.: Osservazioni minime sull'uso dell'articolo determinato nella coordinazione (Studi di grammatica italiana, vol. IV, 1974, Firenze, pp. 17-27)
2. Arthur, I.: Osservazioni sull'uso e sul non uso dell' articolo davanti ai nomi di isole e di gruppi insulari (Studia Neophilologica, A Journal of Germanic and Romance Philology, vol. 41, 1969, Stockholm, pp. 253-297)
3. Arthur, I.: Osservazioni sull'uso dell'articolo determinativo davanti ai nomi di città (Studia Neophilologica, A Journal of Germanic and Romance Philology, vol. 44, 1972, Stockholm, pp. 367 - 410)
- ④ Bianchi, E.: Col calzar del piombo (Lingua Nostra, vol. I, 1939, Firenze, p. 45)
- ⑤ Caix, N.: Sulla declinazione romanza, I. L'articolo italiano (Giornale di filologia romanza, vol. II, 1879, Roma, pp. 1-9)
6. Castellani, P.O.: Ricerche sui costrutti col possessivo in italiano, II. L'articolo e il possessivo (Studi linguistici italiani, vol. 6, 1966, Friburgo, pp. 81-137)
7. De Boer, M.: Il concetto di articolo con speciale riguardo all'italiano (Studi italiani di linguistica teorica e applicata, vol. I, 1972, pp. 511-536)
- ⑧ Gröber, G.: Lo, li -- il, i im Altitalienischen (Zeitschrift für romanische Philologie, vol. I, 1877, Leipzig, pp. 108-110)
- ⑨ Hall, R. A. Jr.: Definite article + family name in Italian (Language, vol. 17, 1941, pp.33-39)
10. Herczeg, G.: Contributi all'uso dell'articolo determinativo in italiano (Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae, vol. 22, 1972, Budapest, pp. 119-139)
11. Leone, A.: Ne 'La Nazione', in 'La Nazione' (Lingua Nostra, vol. 18, 1957, Firenze, pp. 56-58)
12. Loach Bramanti, K.: Note sull'articolo determinato nella prosa toscana non letteraria del Duecento (Studi di grammatica italiana, vol. I, 1971, Firenze, pp. 7 - 40)
- ⑬ Migliorini, B.: Note sulla sintassi dell'articolo (Saggi linguistici, 1957, Firenze, pp. 156-175)
14. Muljačić, Ž.: Ancora sulla forma dell'articolo determinativo italiano (Italica, vol. 51, 1974, pp. 68-71)
- ⑮ Pisani, V.: Continuatori italiani di ipse (Paideia, vol. 8, 1953, Arona, pp. 361-364)
16. Renzi, L.: Grammatica e storia dell'articolo italiano (Studi di grammatica italiana, vol. 5, 1976, Firenze, pp. 5-42)
17. Rigotti, E.: Il significato dell'articolo in italiano (Studi italiani di linguistica teorica e applicata, vol. I, 1972, pp. 85-132)
18. Romeo, L.: Notes on the morpho-syntax of the Italian article (Lingua, vol. 23, 1969, pp. 135-143)
19. 坂本鉄男「13 世紀末迄のイタリア語男性定冠詞の形態について」  
(東京外国語大学論集, 第 10 号, 1963 pp. 61 - 75 )

20. Stammerjohann, H.: *Phonologie des italienischen Artikels (Italica, vol. 50, 1973, pp. 66-72)*
21. 古浦敏生「イタリア語における冠詞研究(1) - 比喩表現を中心として -」  
(広島大学文学部紀要, 第25巻2号, 1965 pp. 279-296)
22. 古浦敏生「イタリア語における冠詞研究(2) - 島の名前を中心として -」  
(広島大学文学部紀要, 第26巻2号, 1966 pp. 146-161)
23. 古浦敏生「イタリア語における冠詞研究(3) - 方角をあらわす名詞を中心として -」  
(イタリア学会誌, 第15号, 1966 pp. 75-83)
24. 古浦敏生「イタリア語における冠詞研究(4) - 格言を中心として -」  
(広島大学文学部紀要, 第27巻2号, 1967 pp. 264-280)
25. Koura, T. *Studio sull'articolo determinativo in italiano con particolare riferimento ai nomi d'isola (Annuario, vol. 11, Istituto Giapponese di Cultura in Roma, 1973-1974, pp. 77-87)*
26. 古浦敏生「イタリア語における冠詞研究(5) - 作家名を中心として -」  
(ニダバ, 第8号, 西日本言語学会, 1977 pp. 15-22)
27. 古浦敏生「イタリア語における冠詞研究(6) - 作家名に関する史的考察 -」  
(広島大学文学部紀要, 第41巻, 1981 pp. 316-332)

### § 3 従来の諸研究が扱ってきた問題点

これまでのイタリア語冠詞研究は、当然のことながら、用法の比較的単純な不定冠詞・部分冠詞におけるよりも、その用法が複雑多岐に亘っている定冠詞に重点が置かれている。

ここで、今までに扱われた問題のうち、興味深いものを若干列記し、紹介したいと思う。(i)イタリア古語においては、男性定冠詞の形態に問題がある。即ち、「il(単数)/i(複数)」のタイプと「lo(単数)/li(複数)」のタイプがどのような環境で現れるか?という問題がある。これに関して Gröber, G.は「il/i のタイプは、単一子音で始まる語の直前で、しかも、先行の語の語末音が母音の時に限り用いられるが、lo/liのタイプは任意の音の前後に現れる」とし、「ilの方がloよりも古い形態である」ということを指摘した。これに対して Caix, N.は「ilもloも古さは同じである」と反論している。〔文献8 & 19 参照〕; (ii) § 1 で示した定冠詞の形態はすべてラテン語の ille に由来するものであるが、ラテン語の強意代名詞 ipse に由来する形は存在しないのか?、という問題がある。これは、例えば、sa(=il), sa(=la)のように南伊方言に多く見られる。〔文献15 参照〕; (iii) 書記法の問題点。例えば、「(フィレンツェの新聞)ナツィオーネにおいて」という表現をする場合に、ne 'La Nazione' としたらいいのか?それとも in 'La Nazione' とすべきなのか?通常、標準語では定冠詞は特定の前置詞(inの他に、a, da, di, 等)と融合するのであるが、上記のような引用符の付いた表現の場合にはどうしたらいいのか?実際のテキストには両者とも現れる。〔文献11 参照〕; (iv) 都市名に定冠詞が付くかどうか?という問題がある。例えば、l'Aquila(中伊アブルッツィ地方の都市名)なのか?それとも Aquila なのか?また、la Spezia(北伊リグリア地方の都市名)なのか?それとも Spezia なのか?実際には両者とも用いられる。また、外国の地名である Los Angeles「ロスアンジェルス」にはもともとスペイン語の定冠詞 los が付いているが、このような都市名をイタリア語として用いる場合どう処置したらよいか?という問題がある。〔文献3 参照〕; (v) 定冠詞の付く島と無冠詞のままでも用いられる島の区別はどうなっているのか?という問題がある。前者の島名としては、il Borneo「ボルネオ」、la Corsica「コルシカ」、la Sardegna「サルジニア」、

la Sicilia 「シチリア」、等、後者の島名としては、Cipro 「キプロス」、Creta 「クレタ」、Malta 「マルタ」、Sumatra 「スマトラ」、等が挙げられる。原則的には、大きな島には定冠詞が付き、小さな島は無冠詞であるとされているが、例外も多い。筆者は「イタリア人は、面積的には小さくても、イタリア領の島にはひいきめに定冠詞を付けている」という事実を既に指摘した。例えば l'Elba 「エルバ」(223.5 km<sup>2</sup>)、la Capraia<sup>(4)</sup> 「カプライア」(19.5 km<sup>2</sup>)、la Gorgona 「ゴルゴーナ」(2.23 km<sup>2</sup>)はいずれも小さな島であるが定冠詞とともに用いられる。〔文献 2 & 22 & 25 参照〕; 等。

#### § 4 今後の研究課題

まず、従来の研究の不備な点を補って、より深いものを求めていく姿勢が大切である。例えば、従来の研究では「有名な人の姓 (cognome) には定冠詞が付き、そうでない人の姓は無冠詞である」とされてきた。しかし、実際には、l'Ariosto 「アリオスト」、il Bembo 「ベンボ」、il Boccaccio 「ボッカッチョ」、il Petrarca 「ペトラルカ」、Foscolo 「フォスコロ」、Garibaldi 「ガリバルディ」、Mazzini 「マッツィーニ」、Parini 「パリーニ」…となっていて、「有名/無名」の対立では解決し難い。そこで筆者は、De Sanctis, F. (1817-1883) : Storia della letteratura italiana 「イタリア文学史」1964, Milano と Sapegno, N. (1901-) : Compendio di storia della letteratura italiana 「イタリア文学史概要」1978, Firenze を資料として、定冠詞の付く作家名と無冠詞の作家名とを区別する要因を探った。さきの日本ロマンス語学会第17回大会(於大阪外国語大学)においても結論の一部を報告したが、要するに、筆者は「古い人/新しい人」の対立を提唱したい。De Sanctis, F. にとって「古い人/新しい人」の対立の分岐点は、17世紀中葉の新しい精神を求めて人々の目が世界に広く向いた時代<sup>(5)</sup>であり、それ以前の古い人は定冠詞が付けられるが、それ以後の新しい人は無冠詞で用いられる傾向がある。Sapegno, N. の場合は、1861年のイタリア独立の時期が分岐点となり、それ以前の古い人には定冠詞が付けられる傾向が見られる。このように、社会的変動の時期がイタリア語の冠詞の用法に微妙な影響を及ぼしている点が興味深い。なお、このことに関しては、文献 27 に詳述しているので参照されたい。

またロマンス諸語間での冠詞の用法の比較研究も今後に残された重要なテーマであろう。例えば、同じ島名でもイタリア語では il Madagascar 「マダガスカル」と定冠詞が付くのに、フランス語では Madagascar と無冠詞である。逆に、イタリア語では Creta 「クレタ」は無冠詞であるのに、フランス語では la Crète と定冠詞が付く。この種の事実を沢山集めてこそ、個々のロマンス語の特色が顕著に現れるのではあるまいか。この意味でも § 2 で示したようなリストをそれぞれ他のロマンス語でも準備し、照合させることが急務と思われる。

#### 注

- 1) § 2 の文献 19 p. 64 参照
- 2) これは、730年のPisaの資料である。

Migliorini, B.: Storia della lingua italiana, 1961, Firenze, P. 69

参照。

- 3) Migliorini, B. : op. cit. P. 228 参照
- 4) Movasi la Capraia e la Gorgona 「カプライア島とゴルゴーナ島は動くべし」  
(Inf. XXXIII, 82)
- 5) Galilei, G. (1564-1642), Torricelli, E. (1608-1647) などの科学者の輩出、歴史哲学の創始者 Vico, G. B. (1668-1744) の「新科学」の出版、等を考えられたい。

## 付 記

脱稿後、次の論文が発表された。今田良信「現代フランス語に於ける定冠詞と地名に関する考察—島名を中心として—」(ニダバ、第11号、西日本言語学会、1982 pp. 44-58)。これは、本稿§2の文献22で用いられた方法論をより精密にして現代フランス語に応用し、その結果をイタリア語のそれと比較したものである。